

第6話 関東の動乱

群雄の割拠に先きだち、関東が分裂して、足利氏は古河公方と堀越公方とに分かれる。管領家の執事である上杉氏もまた山内と扇谷の2家に分かれて、互いに勢力を争う。

京都で応仁の大乱が起こった時に、関東の将士がこれに参加しなかったことは、既にその時に話しておきましたが、これは、別に関東に大紛乱が起こっていたからです。

鎌倉に足利成氏を迎える

これより先き、永享の乱に関東管領の足利持氏が滅びて後は、上杉氏が代わって管領となって東国の実権を握っていたが、さすがに上杉氏では、いかに勢力が盛んでも、快く服従しない将士も少なくなかった。それで永享の乱から10年の後、將軍義政の時に、上杉氏は他の諸将と相談の上、幕府に願って、持氏の遺子で、囚われて京都にいた足利成氏を迎えて鎌倉の主とし、上杉憲実の子の憲忠をその執事とした。時に宝徳元年正月でした。

ところが、成氏は、上杉を父の仇として恨んでいた上に、その近臣らもまた多くは永享の乱に討たれた者の子孫だったので、上杉氏とは仲が悪かった。それで、終に成氏は近臣らの説を容れて、享徳3年12月27日の夜、俄かに上杉憲忠をその館に攻めてこれを殺した。その時、憲忠は22才でした。実に成氏が関東の主となり、憲忠がその執事になってから6年目のことです。

そこで、憲忠の家来の長尾景仲は、憲忠の弟房顕を立てて、足利成氏と戦いを開くと共に、使いを京都に馳せて援けを幕府に乞うた。

古河公方

成氏もまた使いを遣わして幕府に訴えるところがあったが、幕府は成氏の処置を不当として、却ってこれを征討するに決したので、足利成氏は、一旦長尾景仲を討ってこれを破ったけれども、今川範忠が幕府の命を受けて攻めて来るに及んで、成氏はこれと鎌倉に戦って破れ、逃げて下総の古河に據った。世にこれを古河公方という。時に康正元年 -- 上杉憲忠の殺された翌年 -- の6月でした。

ところで、今川範忠は間もなく病にかかって没したので、幕府は更に渋川義鏡を関東に下して、上杉氏を援けて成氏を討たせた。けれども、千葉、里見、結城の諸氏を始め、東国の将士の多くは成氏に属していたので、義鏡らは容易には勝つことが出来ません。

堀越公方

そこで、義鏡は上杉氏と相談して、古河公方成氏に対抗するに足るような名望のある者を仰いで関東の主としようと、使いを遣って幕府に請うた結果、將軍義政の弟政知を迎えることにした。

しかし、鎌倉は、さきに成氏が敗れて逃げた時に兵火に罹って、全く荒廃してしまっていたし、敵地の

第6話 関東の動乱

と道灌は教えられて、はじめて自分の無学なのを恥ぢ、それまでは武勇一途で乱暴な人だったのが、大いに
がくもん ころろ そそ
学問に心を注ぐようになったというのです。



おおた どうかん みんか みの か
大田道灌が民家に蓑を借りようとする

彼は幼少の頃から頭がよくて、武芸などにも人にすぐれていたが、それだけにまだ傲慢な風があった。
すけきよ つね
父の資清は常にこれを心配して、彼が15才の時に、「人はすなおで、正直でなければならない。板でも垣
でもまっすぐだと立つが、曲がれば倒れる」と言って戒めた。すると、道灌は屏風を持ち出して、「ご覧な
さいませ、まっすぐだと倒れますが、曲がれば立ちます」と言って父をからかったという逸話なども伝えられ
ている。

えどじょう きづ
江戸城を築く

24才の時に家を嗣いで扇谷家の家老となったが、ちょうど足利成氏が古河に據った年（康正元年）
で、上総、下総の敵に備える必要があったので、その翌康正2年に城を武蔵野に築き始めた。

第6話 関東の動乱

江戸城が即ちこれで、その翌長禄元年（西暦1457年）4月8日に出来上がった。実に今から560年以上昔のことです。

後に、この城が徳川将軍家の居城となり、更に今日の皇居となったのですが、はじめて道灌がここに築いた頃は、今の日比谷公園のあたりまでは海で、海岸には松原があり、そのころ平川と呼んでいた今の江戸川は、今の一つ橋から神田橋を経て日本橋の下流で海に注いでいたらしい。この川の両岸に平川村があって、そこには漁家などもあったでしょうが、とにかくにも城下らしく、やや人家が多かった外は、一帯に竹藪がつづき、葭葦が茂って、昼も狐や狸の声が聞こえるようなところでした。けれども、北、西は台地つづきで、南には海を控え、東は隅田の大川を隔てて下総、上総に向っていたのですから、たしかに要害でもあり、交通の利便もあったでしょう。

この江戸城が出来ると殆ど同時に、道灌の父の資清は岩槻城（埼玉県）を築き、上杉定正の父の持朝は河越城（川越市）を築いた。また、蕨城はその年の6月、京都から下って来た渋川義鏡の居城でした。

すなわち、上杉氏はこれらの四城と上野、下野方面の山内家の諸城とをつらねて、下総、上総、常陸の方面に勢力を張っている古河公方に対抗したのです。



川越市 河越城跡

道灌は33才の時に京都にのぼって、将軍義政に謁した。この時、後土御門天皇の勅問に答えして、幾首かの和歌を詠んだ。先づ第一に、武蔵野のさまはいかにとお尋ねを賜ると、とりあえず、

露おかぬ方もありけり夕立の 空よりひろき武蔵野の原

とお答え申し上げた。また、隅田川の都鳥はいかにとのお尋ねを賜ると、

年ふれどまだしらざりし都鳥 隅田河原に宿はあれども

と申し上げた。また、汝が館の風景はとのお尋ねを賜ると、

わが庵は松原つづき海近く 富士の高根を軒端にぞ見る

と申し上げた。天皇は御感のあまりに、

武蔵野はかる萱のみと思いに かゝる言葉の花も咲くかな

との御製を賜った。なんとという名誉な事だったでしょう。

古歌にも通じる

道灌はまた古人の歌もよく調べていて、戦争に出た時などにしばしばそれを役に立てた話なども伝えて

第6話 関東の動乱

います。ある時、軍を率いて利根川を渡らなければならないことが起こったが、折柄、真つ暗な夜の事で、どこが浅いか深いかの見当がつかずに先鋒の者が困っていると、道灌は命を下して、波音の高いところを渡れと言って、無事に一同を渡らせたことがある。それは古歌に、

そこ ふち やまかわ あさ せ あだなみ た
底ひなき淵やはさわぐ山川の 浅き瀬にこそ仇波は立て

とあるのから思いついたのだったということです。

また、ある時、主君の扇谷家 上杉定正と共に上総の庁 南城を攻めようとして、夜、海岸の崖道を通らなければならないことがあったが、そこには敵が石弓を仕かけていたので、避けて、海辺を通ろうとした。

しかし、暗くて潮が満ちているか干ているか分からなかったので、定正は軍をとどめて、人を出して潮の満干をみさせようとしたが、恐れて誰も行くものがいなかった。すると道灌は、では自分が見て来ようと、馬に一鞭当てて出かけて行っと思ったと、帰って来て、大丈夫、潮は干いている、軍をお進めなさい、と言った。定正はどうしてそれがわかったかと尋ねると、道灌は、

とお ちか はまちどり な ね しお みちひ し
遠くなり近くなるみの浜千鳥 鳴く音に潮の満干をぞ知る

という古歌で判断することが出来ました。千鳥は今、遠くで鳴いています。と答えたので、一同は安心して、海辺を通過して、急に敵の不意を襲ったということです。

こういう風で、道灌は文武の達人でしたところから、人望が高く、扇谷家が栄えると共に、彼自身の勢いもまた良くなった。すると、持って生まれた傲慢の癖が時々顔をだしたりしたので、後には主人定正の機嫌をそこねたことも度々でした。山内家の房顕の子の顕定は、久しく扇谷家の勢いのさかんなのを嫉んでいたが、ほのかにこの事を聞くと、喜んで、ひそかに手をまわして、うまく定正の近臣と結び、ついに道灌に謀反の野心があると言って定正に讒した。

道灌が誘殺されて扇谷家の勢いが衰える

定正は、そうさえ道灌の傲慢なのを快く思っていなかったところでしたので、欺かれているとは知らずに、急いで道灌を江戸城から相州糟谷（神奈川県伊勢原市附近）の自分の館に呼び寄せて、ご馳走をした上、風呂に入らせて、その油断をしているところを大勢の家来に槍で突き殺させた。この時、道灌は顔色も変えずに、槍の柄をおさえながら、

きのうまでまくめうしうを入れおきし へむなし袋 今やぶりけむ

という辞世の歌を詠んで斃れたということです（訳注：きのうまで、どうしようかと迷っていた心をしまつて置いたこの袋も、ついに破れたぞ）。年は55才でした。墓は今も糟谷村秋山の同昌院に在ります。

一方、山内家 上杉顕定は、この時、武蔵の鉢形城にいたが、扇谷家 上杉定正から首尾よく道灌を討ち取ったという知らせを受けると、してやったりと心中大いに喜びながら、兵を率いて急に定正を襲った。定正は、はじめて欺かれたことに気がついたが、すでに遅かった。彼は顕定の不信を大いに憤って、その後は古河の足利成氏と結んで、顕定に当たった。

第6話 関東の動乱

こうして両上杉氏もまた相対持して争うようになったので、両家ともに次第にその勢いが衰えました。
なお、道灌どうかんに対して、朝廷は大正7年11月18日に従三位じゅうさんみを贈られた。今の宮城きゅうじょう（皇居）の本とももというべき江戸城え どころを築いた功績こうせきがあったからでしょう。

（ 第6話 関東の動乱 終わり。 次は前頁に戻り、 第7話 後北條氏の崛起 〜）